

2016年
6月21日
火曜日

久保 真 教授（経済学史）

「良き社会」の構想者としての 経済学徒

私は、十八世紀から十九世紀の西
欧で、経済学という学問が産声を上
げてよちよち歩きを始めた頃のこと
を研究しています。十八世紀から
十九世紀といえば、アメリカ独立や
フランス革命といったそれこそ世界
史的な大事件が次々と起こるのです
が、黎明期の経済学は、当時の国際
的・国内的な政治状況に対応しつ
つ、また他方でそうした政治状況に
一部影響を与えつつ、育まれていき
ました。経済と政治との関係や理念
の組み合わせは極めて多様であった
わけですが、だからこそその関係は
常に緊張を孕んだものとなりました
。当時の経済学者たちはまず何よ
りも「良き社会」を構想するいわば
「社会哲学者」と言うべき存在だっ
たのです。

実は、現代の経済学者たちも、のっ
ぱりした無色透明な人たちではあり
ません。例えば、ノーベル賞受賞者

であり日本でも有名なステイグリッ
ツやクルーグマンは、アメリカでは
リベラル派を代表する経済学者で
す。他方、皆さんも使っている教科
書を執筆したマンキューという人
は、保守派、共和党系の経済学者と
して知られています。実際、マン
キュー自身、次のように言っていま
す。「経済学者が、本当は隠してお
きたい秘密をお教えしよう。「経済
学者は、」経済学者としてだけでな
く、政治哲学者としても話をしてい
るのだ。つまりは、世界の仕組みつ
いての理解だけを基に提言を行って
いるのではなく、どうすればよい社
会を築けるかという自らの判断もそ
こに加えている」のです。が、これ
が「隠しておきたい」ほど不都合な
真実であるのはなぜか？ マン
キュー自身も教科書ではそうしてい
るように、経済学は科学なのだ、理
論とデータに基づいた全く客観的な

学問なのだ、と初学者たちに繰り返
し語っているにも関わらず、実際
は、自らを含め経済学者は「良き社
会」を構想し、主観的な判断も厭わ
ず「哲学者」でもあるからでしょ
う。でも、私に言わせれば、これは
不都合な真実などでは全くない。む
しろ、経済学という学問の豊かな伝
統に連なっている証拠ですらあるよ
うに思うのです。先述のように、黎
明期の経済学者たちは、何よりも「良
き社会」を探究した社会哲学者だっ
たのですから。

経済学は社会の構造や根本を分析
するに非常に鋭利なツールをいろい
ろ提供してくれます。そのお陰で、
できることとできないことについ
て、明確な結論を引き出すことがで
きる場合も少なくありません。しか
るに、具体的な状況においては、こ
うしたできごととできないことと
は、集合的な形でトレードオフを構

成します。つまり、Aを優先すると、
Bを犠牲にせざるを得ず、Bを優先
すると…、というような形です。そ
の場合、何をどれくらい優先すべき
でしょうか。単なる個人の好みを超
えて、がしかし他方で、単純な多数
決ではなく、「良い社会」のあり方
を指し示すことはできないでしょ
うか。実は、こうしたことこそ、経
済学者たちが社会哲学者として長きに
渡って取り組んできたことなので
す。知人の思想史家によれば、現代
は、「それが答えだ！」と言ってみ
んなを従わせることはできないけれ
ど、「みんな違ってそれでいい」な
んて言ったら社会が成り立たない、
そういう時代だそうです。もし彼の
時代認識が正しいとすれば、まさに
経済学を経て考え抜かれた「社会哲
学」こそ今必要とされているのでは
ないかと思うのです。